

---

# もう一人の死神代行

水風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう一人の死神代行

### 【Nコード】

N0422Z

### 【作者名】

水風

### 【あらすじ】

藍善の反乱から5ヶ月がすぎ、何事もなかったかのように過ぎていく時間。

しかし、突然現世にまたもや事件が！

（一護が死神の力失ったとかは無視してね！）

## 死神代行黒崎一護！（前書き）

いつものように、虚退治に終われる死神代行黒崎一護。しかし、突然の出来事であった後ろから突然切れ。瀕死状態となってしまった一護。しかし、魔法を使う一人の少年に助けられるのであった。

## 死神代行黒崎一護！

「仕方ないな、こんなところで使う事になるとは、思わなかったなあゝ吸い込み開始！」

そのかけ声とともに彼の手の平へと吸い込まれる一護。一体この少年は何者なのか？

時間が過ぎていき、6時間後。

「ん？ここ、どこだ？何も見えねえ。なにかに閉じ込められてんつておわゝ！！！！！！」

一護が、またもや吸い込まれ、彼の手の平から出てきた。

「つててて！つてここ浦原商店か！？なんでここに？つてあれ？そういうえば俺誰かに切られたような？」

「あゝ？」

とつさに一護は振り向き、後ろを見た、するとそこには知らない小中ぐらいの少年が立っていた。

「お前、誰だ？」

「えゝと、たまたま通りかかった人ですが、その格好は死神？ですか？」

一護は驚いた、こんな少年が死神の事を知っているなんて思いもしなかった。

「彼は、あなたを助けた人ですよゝ黒崎サン。」

自分の名前を呼ばれた一護は、またもや振り向くと、元12番隊長長ならびに、初代技術開発局局長、浦原喜助が座っていた。

「浦原さん！　つて俺が助けられたつてどどういう事だ？てゆうかこんなひよろひよろなガキに俺をおぶつてここままでくるつて無理な話じゃ…つてこいつ！死神の姿が見えてんのかよ！？」

今頃気づいた一護をほつといて浦原が話を続ける。

「彼はおぶつていったんじゃないくて、空間移動能力を使って手の平に吸い込ませ別次元に飛ばし、それでここに戻したつていう事です

よ」

一護は話しについていけなくなり首を傾げた。

「つまり、あなたを手の平のどこでもドアを使って別の場所に移動させてここに移動させたっていう感じですかね？」

何となく状況を理解した一護は、この少年が何者なのかが分からなくなつて来て、とりあえず問い掛けた

「お前、何者だ？」

そう、問いかけられ、自己紹介をした。

「僕の名前は、水谷紘。魔法が使えるのが特殊能力で、別世界から来た。僕の住んでいたのは地球だったけどある組織に招待されて、今はそこで暮らしているんだけど上からの命令でソウル ソサエテイの手伝いに来た。てゆうかさつき来たばかり何だけど…なんだかあなたを別世界へ移動させている途中でなんだか、とても気持ちよい感覚になつただけ…」

一護は、その気持ちよい感覚とゆうのはとりあえず後まわしにして、その別世界の事を聞こうと思ったが、浦原に先をこされた。

「そうそう、それでさっきの話の続きなんです…」

ふと思いだしたように水谷が表情を変える。

「ああ、僕が来たところは、ミッドチルダというところで魔法文明が発達していて、僕はその魔導師として働いてですね、それですね。僕達はリンカーコアっていう霊力の源のさけつみたいなものです。まあだから死神の姿が見えるというわけです。」

かなりの話しの長いもので一護はさっぱり分からなくなっていた。

浦原は理解出来たようだ。

「あ、そうだ、これ渡したいんすけどちょっとこっちに来て下さい。」

一護はふと、気づき、さっきの気持ちよい感覚の正体を考えていたが、すぐにその必要が無くなった。

なぜなら、

彼が浦原の杖によって魂が抜かれ、その姿は

死神だったのだから。

## 死神代行黒崎一護！（後書き）

新しく書きました。

B L E A C Hと魔法少女リリカルなのはのコラボなんですが、のはやはやてが出るのはまだ先という事になってしまいましたが。

もちろん水谷紘ってオリキャラですよちなみに読み方は「みずたにひろ」となりますが、ラーメン食いながら適当に付けた名前です。

## いざ勉強会！（前書き）

異世界からやって来た少年に助けられた死神代行黒崎一護。しかし、その少年にもう一つの力があつた。



## いざ勉強会！

「うわあああああ！！僕がもう一人いる！てゆうか動かない！？しかもこの刀にこの黒い服ってまさか…？」

「死神っス！」

かなり動揺している水谷にあっけなく答える浦原

「浦原さん、普通の人の死神化ってあんのかよ！？」

一護は今自分が質問出来るただ一つの質問だ

「無いっス！　しかし、死神化した理由は二つ、肉親が死神の場合、黒崎サンのようにね、もう一つは、死神からの死神の力の譲渡、これもまた黒崎サンと同じっスね。」

一護はあっけなく答えられたがまた一つ質問が増えたような顔して、また浦原に質問する。

「じゃあ、肉親が死神って事か？」

「それはないです、なぜなら、肉親が死神ならば、霊力があるはずですしね。」

一護は一瞬顔を緩ませたがようく考えて見ると、まだ納得がいかなかったため、さらに質問する。

「じゃあ、どうやって死神になったんだ？死神からの譲渡でもねえし。」

浦原は少し考えこむかのように少し、頭を下げ、すぐに、顔上げた。

「黒崎サン、これは死神の譲渡っスよ。」

一護はもう意味がわからなくなり、少しの間考え込みまた質問する。

「じゃあ、誰からだ？」

そう質問したが、浦原の返事は、「あなたの事を一番よく知っている人物です」と言われ、色んな死神を思い浮かべるが、全く思いつかない。そんな一護に浦原は、「あたしのかなり近くににいる人っス」といわれ、頭を整理してみる

まずここにいるのは、一護、浦原、水谷の三人であり、水谷はまず

違う、一護もまず譲渡はしていない、浦原は、あたしの近くといった。これでは全く分からない。

「しょうがないっスねえ。彼に、死神の力を譲渡したのはあなたっスよ、黒崎サン。」

「俺は、そんな事した覚えはねえーぞ!？」

「彼はどうやってあなたを運んだんでしたっけ？」

確か、別世界に飛ばしてどうのこうのだから、と言葉を探そうとしたらいきなり。

「そのとうりっス!」

「俺まだなんも喋ってねえぞ?」

この時すでに話が全く分からない水谷は、黙って聞いている。

「そうそう、この話はあたしもこれ以上答えられないんで、あたしの考えを述べたいんスけど、いいっスよね?」

「ああ、も…」

「わっかりましたア!」

さつきから全て、自分がいい終わる前に、全て言って来る浦原に少タイライラしてきた一護だが、とりあえず浦原の話を聞く事にした。「あなたにはこれから、修行してもらいます、嫌といってもムリヤリやらせますがね!」

「(僕に選択肢はないんだな。)」

そういった後に浦原は何か思い出したような口振りで変な薬品を一護に見せる。

「なんだよ、これ?」

「とりあえず見て下さいっスあれを!」

しかし、一護向いた方向と、浦原が指を指した向きは、ただのふすましかない。

「どこみてんすか?こっちですよこっち。」

「(畜生オ!!!)」

マンガであれば、リアル一護になっているほどの声を心の中で言う。「ちよっとこれ飲んで下さい!」

一護は目を丸くして見た、なぜなら、

色 青

中に入っているもの 変なほこりみたいなもの

匂い 理科室

だったからだ。一護は拒否したが、浦原がムリヤリ飲ませようとする。

「や、止める！」

「いやっス」

「俺は絶対飲まねー！」

「何かに誓ったような口振りっスねえ」

「ちよつとまで浦原さん！それ、何かを俺に言わそうとしているんじゃない！」

この時一護が思ったのは卍解の会得の時に斬月に言った結構かっこいいあの言葉である。

「じゃあその言葉、言って下さい」

「それは言わねえよ！」

即答で一護は答える

「言わないとクラスメイトの記憶を操作して、毎日コンさんみたいな事をしていと思わせるさいみ……」

「分かった！言う！言えばいいんだろ！？言えば！」

「それがいやならジャステイスハチマキのやつでもいいスけどねえ。」

「一護も、もはや突っ込む気力も無くなり、言う決心を決める

「俺のたまっつ！おわあああ！！！！！」

「どうすか？おいしいっスか？」

一護は「魂」よりも恥ずかしい「たま」で区切ってしまい、しかも浦原に変なのを飲まされたのだ。

「な、何すんだよ！」

「あ、そうそうこっちのも飲みます？今のやつよりも改良したんスよ」

「違いは？」

「ビタミンCがはいって…」

「いらねえ」

ものすごい上機嫌な浦原とは別に、変なのを飲まされた一護は、気持ち悪くて仕方がない。

「さあ、それじゃあお勉強会でも初めますかね」

「ああ、はい、よろしく…お願いします」

「それじゃあ日程を發表しますかね 黒崎サン！あそこの引き出しの上から二番目の戸に普通の紙が入ってるんで取って来て下さい」  
そう浦原から言われた一護であったがまたもや浦原のフェイントに引つかかってしまい、上から大量の猫缶が落ちて来て、生き埋めになっってしまう。

「夜一さんのやつこんなとこにあんのかよ！？」

そう、いい浦原のほうを見ると二人ともすでに、地下の勉強部屋に入っており、更なるフェイントに一護はかかってしまう。

「ちくしょうー！！！！！！！！」

## いざ勉強会！（後書き）

ギャグをちよつと入れてみました。

ちなみに、次回から死神図鑑パープルをやります。死神図鑑ゴールデンとまったく同じものですが、まったく同じというのは話じゃないですよ。

## 死神についての説明会

「くっそー！！俺を置いていきやがって。」

一護はいつの間にか勉強部屋に入った浦原と水谷に追いつこうと、全力で瞬歩を重ねていくが、そこに浦原達の姿が無かった。

「あれ？おっかしいなあ？」

すると上から、浦原達が降りて来て一護の上に乗っかる形になる。

「お、おもーい！！！！！」

「すいませんねえ黒崎サン。もしかしたら勉強部屋の畳開けたまんまで先に来てると思っちゃいました？それなら大成功っス！」

一護は最後のほうがかなり気になり、聞き返す。

「大成功っス？」

「大成功っス！」

「おい？」

「はい？」

「どっかに隠れてたのかよ？」

「黒崎サンが認識出来ていなかったただけっスよ。30番台の鬼道でここまで引つかかるとは、いやあー！！大成功っス！」

一護はたった30番台の鬼道にあわれに惑わされてしまい、かなりの屈辱を得る。

「それじゃあ、黒崎サンと水谷サンの勉強会を始めましょうか！」

「なんで俺も修行しなくちゃ行けねんだよ！？」

「だって、鬼道使えないなんて、おかしいでしょう？黒崎サンの霊圧なら80番台以上も楽勝でしょう。でもそれは、霊圧のでかさだけ。霊力をうまくコントロールしなければならぬ。例えば、石田サンのようにね！もう一度言います。石田サンのようにね！石田サンと黒崎サンの霊圧のコントロールなんて月とゴキブリじゃないっスか！もう一度言います。石田サンのようにね！念のためもう一度いいま……」

「言わなくていい！」

やってやるうじゃねえか！石田なんかに負けるかよ！」

「（相変わらずっスねえ。）」

一護はとてやる気であったが、浦原にコンに任せきりだから、一度出直して来いと言われ、しぶしぶ家に帰り、5分で戻って来た。

「浦原さん、コンを家に置いてくとあぶねえから、俺の体ごと持って来たんだけど。いいか？」

「ええ、もちろん。で、それならご家族にちゃんと説いたんスか？どこに行ってるとか。」

「ああ、友達んちに泊まるって言った。」

「なんか…処女の外泊の言い訳みたいっスね…」

「殺すぞ…！」

早速特訓に入る前に、水谷が質問する。

「てゆうか、なんで修行するんですか？」

「死神達の手伝いに来たんだ。それに、君は運の良いことに、オレンジ髪の不良から死神の力を分け与えられた。」

「不良じゃねえ！」

そんな一護を無視し、話を続ける。

「死神の仕事は2つ。まず、といっても、まず、霊の種類からの説明っスね。」

一つは、「整」と呼ばれる、通常の霊、普通の人がいう幽霊はほとんどこれと言っていていいでしょう。

そして、死神が倒すべき、悪霊、それが、「虚」と言うものです。生者死者を襲い、魂を食らう。それが虚です。

そして、死神の仕事は2つ。

一つは、整を「魂葬」と言うもので、ソウル ソサエティに送る事、簡単に言えば、成仏させる事です。

そして、2つ目が「虚」を昇華、場合によっては、滅却する事、たぶん聞いていると思いますが、滅却された虚は、消滅すると、ですが、正確には、消滅するのではなく、記憶などを失い、ブランクと

言われるものになり、記憶はシネンジュと言われるものに分けられ、ブランクはその内、普通の整に戻ります。ですから、安心していいんすよ。でも、あんまり滅却すると、世界のバランスが崩れてしまいますから。なので、出来るだけ、虚相手に鬼道を使わないで下さいね。まあ、使ってもいいんすけどね。まあ、でも、こういうのはクインシーに言う事なんすけど……」

浦原の話が終わり、一護が質問する。

「なあ、確か死神の力の譲渡って、ダメな事じゃ無かったか？」

「問題ないですよ。実は、山元総隊長から連絡がありましたね。もともと、彼に、死神の力を譲渡する予定だったんす。なので、大丈夫っすよ。」

一護は納得し、浦原が修行を開始した。

死神図鑑パープル

一「あれ？水谷ってどっか泊まるとこあんのか？」

水「ええ、もちろん、実は、石田って人と、井上って人と、茶渡って人が、協力してくれるみたいで。」

一「（石田の場合は）」

雨「これを着てくれ！どうだい！この全て白のクインシーの衣服！」  
こうなるな。

井上の場合は

井「ご飯出来たよ！わさびとはちみつのたいやき風ラーメン！」

こうなるな。」

水「どうしました？」

一「出来るだけチャドの家か、俺の家に来い！」



## 死神についての説明会（後書き）

久しぶりの投稿で、思わず死神図鑑パープル忘れてしまつところでした。

感想や誤字の報告、アドバイスなどお待ちしております。

## 死神の基本

「準備はいいつスカあ？」

「ええ！いつでも！」

今、一護と水谷は浦原と修行を開始しようとしており、一護は霊力のコントロールのために、霊力を手の平に集め、球状のものに安定させる特訓（ナ　トでいう「らせ　が　」みたいな感じ）をしており、水谷は死神の基本、斬拳走鬼を教えてもらっている。

「斬拳走鬼というのは死神の基本で、斬は主に斬魂刀や、霊力があまりにも小さく、斬魂力がない死神は浅打と呼ばれるただの刀で攻撃すること。」

拳は主に白打、つまり素手での戦闘。

走は主に瞬歩と言われる死神の最速戦闘法です。しかし、霊力が小さい人は使う事が出来ませんし、結構霊力消費するんで敵のアジトみたいなところでの乱用は避けたほうがいいつよ。

そして、最後に鬼、鬼は今黒崎サンが練習してる鬼道の事っす。これは霊力のコントロールが難しく、気を緩めば暴発する事もあります。鬼道には破道と縛道の二種類があり、どちらも便利で強力な武器になります。しかし、鬼道はそれぞれ1～99まであり、番号が高くなっていけばいくほど難しく、強力になり、霊力コントロールが難しくなっていくきます。そういう時は鬼道それぞれの詠唱を唱える事で、さらに霊力コントロールがうまくいきます。逆に、簡単に鬼道がだせ、詠唱を唱えずに鬼道を使用する事を詠唱破棄といい、隊長各でも詠唱破棄はせいぜい60～80ぐらいですのであのように結構難しいんす。」

浦原が指を指したほうには、霊力のコントロールがうまくいかず、自爆した一護がいた。

「げほっ、げほっ、げほっ、」

一護が鬼道を使用出来るようになるのはまだまだ先のようだ。

「では、早速斬術の特訓といきましょうか！」

水谷が斬術を習っているが、一護のほうは

「くっそー！！！！何回やつても出来ねえこのままだと。」

（石田「こんな事も出来ないのかい？……かい？……かい？……

かい？……かい？」）あいつに負けてたまるかよ！もつか

いだー！！」

ぼこん！

「おわああー！！」

全然ダメな一護である。

そして、水谷のほうは

「へえ、ちゃんと、霊力のコントロール出来たじゃないっすか！」

実は水谷も一護同様、霊力を無駄に垂れ流していたため、バカデカイ斬魂刀だったのだ。

「黒崎サンとは大違いっす！！！！！！！！！！」

「聞こえてんだよ！！てゆうかわざと俺に聞こえるように言ってる！！！！」

そんな一護を無視し、話を続ける。

「では次に、その斬魂刀であの木を切ってもらいましょう！」

「（なんとなくだけど、木が成長しすぎて切って欲しいだけなんじゃ……？）」

「どうしましたあ？」

「いや、なんでもないです……」

やはり、腹黒い男であった。

死神図鑑パープル

一護「そうだ！浦原さん！特訓で腹減ったんだけどよ！」

浦原「ダメっすよ！うちは貧乏なんスから！」

一護「じゃあ！飲み物は！？」

浦原「ダメっすよ！貧乏なんスから！」

一護「じゃあ！あんたの店の商品は！？」

浦原「いいっスよ！ポテイトチップス薄塩大袋 たの1000円  
！1ペーパーっス！」  
一護「高すぎだろ！！」

## 死神の基本（後書き）

斬魂刀ってちゃんと書けないw

こんぱくって打つてもたく、はく、って打つてもちゃんとしたぱく  
が出ないwすみません。

コピーも出来ませんし……

あとでちゃんとしたパソコンで編集しときますね！

感想やアドバイス、誤字などがあつたら、教えて下さい。

## 新たな敵

「縛道の1、賽！」

「出来たじゃないっすかあ！黒崎サン！！！！よりも早く！」

「だから聞こえてんだよ！！！」

初日の修業から、一護はずっと鬼道の練習をしているのだが、まったく出来ず、自爆しまくっている。

「おらあ！！！」

「ばーん！！！」

「おわあああ！！！」

「ふう、これじゃあ鬼道は一生使えませんねえ、  
その時であった、」

「！！！！」

突如巨大な霊圧がのしかかるように、かかって来た。

「なんだよ、この霊圧は！」

「あたしの予想が当たっていれば、黒崎サンを襲った人物と関係があり、霊力があるものを無差別に襲っている、と考えるべきでしょう。」

「なら、ささつといかねえと！」

「では、水谷サンも一緒に向かって下さい。」

浦原に言われたとおり、二人でその場所に向かい、浦原商店から飛び出していった。

「きつと、答えてくれるはずです。水谷サン。」

そして、場所は移りソウル ソサエティ。

「緊急指令、緊急指令、現世、空座町付近にて、巨大な霊圧確認、至急日番谷十番隊隊長、阿散井六番隊副隊長、松本十番隊副隊長、十一番隊斑目三席、綾瀬川五席、十三番隊朽木ルキア、計6名の隊員は、至急現世へ向かい、死神代行組と合流、尚、現場にはクインシー石田雨竜の霊圧を観測、さらに、茶渡泰虎、井上織姫、黒崎一

護、3日前に死神代行となった、水谷紘が現場へ向かっている模様、これにて連絡を終わります。」

再び現世、空座町

「君は一体何者だい？」

「答える必要はない。」

「（この姿、破面か？）」

破面らしき人は、何も言わずに攻撃を仕掛けて来た。

「不意打ちとは、趣味が悪いね。」

「その服に比べればなんともない。」

服の事は石田はどが悪いのかがまだ分からないのであったために、

「君に言われたくないね！君だつて充分変な服じゃないか！」

「この服は…藍善様のデザインだ。」

そう言うのと、セロを石田に向けて放つが、それに対応するために飛廉脚でかわす。

「確か、飛廉脚といったかな？」

「知っているのか、光栄だね。」

「クズの戦いを見ていたからな。」

彼の言うクズとは、チツルチ サンダーウィッチの事である。

「（この霊圧…茶渡君に、井上さんか？黒崎と確か、水谷といったか？すぐ近くにいます。このままだと逃げてしまう可能性がある…黒崎たちが来る前に終わらせるか…いや、まだ刀も抜いていない…流石にそれは無理か…なら僕に出来る事をするだけだ…！）」

「（雑魚に……バカデカい霊圧が近づいている…このままだと護挺13隊の死神も来る可能性がある…ここは引くか……いや、それともここで全て潰すか……？しかし、危険が伴うな…引くと言つても相手はクインシー、倒すのは簡単だが、逃げるのには無理があるな…なら）」

カタッ

「刀を抜いてくれるとは、ありがたいね。僕と本気で戦う気になったのかい？」

「雑魚が大量に来る前に終わらせるだけだ…。」

そういうと、刀を折り、解号を唱えだした。

「天裂け バラディン 天馬魔群」

「なっ！（なんて霊圧なんだ）

その霊圧はしつかりと一護達にも伝わっていた。

「なんだ…この霊圧は！」

「さっきよりも強いですね…。」

「ム…」

「どんどん濃くなってる…。」

「結構デカいっスねえ…」

「（なんだ…これ、すごい霊圧…一兄もすぐ近くに…。」

「まずいな…もう始まっている！急ぐぞ！」

「「「「はい！」「」「」」

「……………」

「大丈夫かの？」

一護、水谷、茶渡、井上、浦原、夏梨、日番谷、一心、夜一、他にもたつきや啓吾、水色にもしつかりと伝わっていた。

「（このままだと、まずいな…）松本！現場から半径3百間の空間凍結を要請しろ！」

「分かりました！」

そして、戦いのほうはというと。

「（あの翼には麻痺効果があるのか…？それだけじゃない、スピードもパワーも跳ね上がっている…、それに、翼のあの穴は何だ？）」

「気づいたようだな、この翼の穴に、この穴の秘密を見せてやろう、  
インフェナイト スリック  
無限の滑走」

「な！（まさか、ペッシェの必殺技と同じ名前だなんて！）」

ペッシェの必殺技といえば、触れたものをものすごいヌルヌルする事が出来る液体の噴射である（ちなみにその液体は無限では無い）。まあ本当にヌルヌルしすぎるため、相手の攻撃も衝撃しかかからないのである。



しかし、もちろん今やろうとしている必殺技はそんなのでは無い。

「（これは、地面に潜った？…まさかこれは。）」  
「どかん！」

「これは、地雷か！？」

「そうだ、この地雷はロツクオンした相手の周りや真下に潜り込み、爆発する。逃げて、追いかけてくる、それに、この地雷は俺と細い霊力で出来た管を使い、霊力を爆撃と移動に消費される、つまり何度爆発しようと、管と俺の霊力がある限り何度でも使える。この管を壊したとしても切断面から霊力再生が可能だ、そして、名前のとおり、無限に出続ける。」

「なるほど、つまり君を倒すか、君の霊力がなくなると地雷は壊せないという事か、それなら話は簡単だね、僕の霊力がつきる前に、君の霊力を奪えばいい。」

「出来るのか？」

「出来なくともやるしかないさ。」

「そういい、石田は早速、魂を切り裂く物を取り出し、相手の霊力を奪い易くする作戦に出る、しかし。」

「その武器はすでに使えない、能力もすでに分析済みだ…。」

「へえ、ザエルアポロのような事を言うね。」

「ザエルアポロとは、ラスノーチエスに乗り込んだ時に石田と恋次が戦った十刀であり、科学者である。」

「あのお方が何のデータも残さずに死んだとでも？」

「やはり、気に食わないね。（いつの間にデータなんて残していたんだ？まで、それなら、黒崎達的能力は知らない筈だ、それにちようどいいところに助っ人が来たみたいだね。）」

「月牙天衝！」

そこに一護の必殺技、月牙天衝が降ってきた。

「遅いぞ黒崎。」

「わりいな、でも他にも来たみてーだぜ、」

「巨人の一撃！！」

「霜天に坐せ！！氷輪丸！！」

「吠えろ！蛇尾丸！」

「唸れ！灰猫！」

「舞え！袖白雪！次の舞い！白蓮！」4方向からの一斉攻撃を回避した先には。

「椿！弧天斬盾！」

「破道の4！百雷！」

井上と水谷の攻撃は外れたが、良いコンビネーションであることに間違いはない、勝つ事が出来るかも、と思ったが、しかし、甘くは無かった。グランレイ セロを打ち、一瞬にして、一護と恋次、日番谷以外のメンバーを戦闘不能にさせてしまったのであった。

「何…だと…！」

「ありえねえ…！」

「なんてデタラメな威力なんだ…！」呆然とする3人であったが戦う決意をする。

「じゃあーねー、阿散井！黒崎！卍解して戦うしかねえ、（空間凍結の準備はまだ出来てねえ、しかも一気に3人になっちまったしな  
くそっ！どうする！？）」

「…卍！解！」「…」

「天鎖斬月！」

「狒狒王！蛇尾丸！」

「大紅蓮氷輪丸！」

その頃、水谷は自分の内なる世界に来ていた。

「あれ？ここは？」

見渡すかぎり全てが、ビルだらけでそのビルの側面に座っていた。  
「こつちだ。」

水谷が振り返ると、黒衣を身にまとったおじさんがいた。

「（このおじさん誰だ？。）」

「驚いたな、なぜそんなところで座っていられる？」

そう、水谷は先ほど言ったようにビルの側面に座っていたのだ。そ

して、一気に落ちた。

「うわああああ！！！！！」

「絶叫とは余裕だな！頼もしいぞ！安心しろ！死神は死を司るもの！多くの霊なる物を支配する！」

「な…何の説明ですか！」

「そう！他人から直接死神の力を魂に叩きこまれば同時にその者の能力と記憶を魂パクの同調時に時放たれるのだ！！」

「だから何の説明ですか！？」

「思いだせ！先ほどお前は誰からも教えられていない百雷を無意識のうちに打っていた！

しかし！その事により今私の力がお前から離れ、消滅しようとしている！当然だ！お前は瀕死状態の黒崎一護から力を譲り受けたのだから！当然、私が消滅すればお前も消滅する！だが、まだ生きるすべをなくしたわけではない！お前の魂の奥底にお前自身の死神の力がリンカーコアの消滅との引き換えに構成された！

さあ、探せ、隠れ去った死神の力を、探し出せる時があるとすれば、それはこの世界が崩壊を始めた今を於いて他にない！今降って来ている無数の箱、この中のたった1つだけにお前の死神の力が隠れている。

それを見つけたせ！もう時間は無いぞ、この世界が完全に崩れさる前に見つけなければ…お前は消滅する！」

しかし、もちろん無数の箱を1つずつ調べるわけにはいかないため、方法を考える。

「（どうすればいい？はつきり言って、鬼道を使えたのだって最近だし、霊力のコントロールもうまく出来てはいないし、あれ？そういえば、あの人魂パクの同調で記憶がとか言ってたっけ？まてよ…それだっ！！！

一護さんの記憶を探せばいいんだ！今はこれしかない！

……………この記憶だ！

（知ってたかい？死神の霊絡は色が違うってことも。）

これだ!!!

「斬魂刀の……柄………?」

すると後ろから声がする。

「よく…見つけてくれた…」

次こそは…私と戦えたらいいな…」

「まさか…あなたは………」

「何をしている!崩れるぞ!!早く私を引き抜け!!」

そして、再び、一護達。

「卍解か……」

「(やはり………通じねえか)」

「(くそ…卍解してもこの程度かよ)」

「(虚化してるってのに全然ダメじゃねえか)」

その時であった。

「縛道の61!六杖光牢!」

死神図鑑パープル

浦原「ふう!」

じん太「なあ店長!」

浦原「何です?じん太」

じん太「店長は行かないでいいのか?」

浦原「ええ!あれだけのメンバーなら大丈夫っスよ!」

じん太「…面倒臭いだけだろ?」

浦原「何でばれたんだろ?」

じん太「(ばれるも何も…)」

雨「(いつもどおり…)」

浦原「まあ!何かあった時の為に待機しておかないと行けませんから!」

じん太「本当かよ?」

雨「そこは信じようよ、…一応」

## 新たな敵（後書き）

いつもより長めに書いてみました！

最後に六杖光牢打ったの誰か分かりましたか？水谷では無いですよ！？

ヒントは百雷や六杖光牢を結構使う人です！もう分かりましたか？では感想や誤字の指摘、アドバイスなどがあつたら下さい。

現実には真冬だけど小説は真夏スペシャル！（前書き）

コン「よう！テメーら！BLEACHのスーパーアイドル！コン様だ！

今回は本編じゃあねえぜ！今回は、「真冬だけど真夏スペシャル」だぜい！こっから先はよく読んでけよ！

なんと！このスペシャルな企画は！今日と明日続けてやる予定なんだが！その小説の途中に全部で6つのキーワードが出題される！それを全て答えて！小説最後の宛先に送ると、なんと！すげえお宝が……」

一護「なんのテレビ番組だぼけえ！！

もちろん、今日と明日やんのは本当だが、こいつがBLEACHスーパーアイドルってとこと、キーワードも宛先もお宝もなんもねえぞ！あんのはこいつの綿だあ！！！」

コン「ぎゃあああ！！！！！！！！！！」

## 現実には真冬だけど小説は真夏スペシャル！

「よう！テメーら！よく集まったな！？俺様が招待した奴は全員揃ってか！？」

「冬獅郎と乱菊さんは仕事があるから明日から参加で、1番隊が離れるわけにはいかん！とか言って、じいさんと「ささかま」とかいう副隊長は来ないってよ。」

「一護、ささかまじゃねえよ、さきべな。」

「それも違っただろう！恋次！

ささけべだろっ！」

注 ささきべ。

「そうそう、碎蜂と大前田もなんかやられねばならく事があるから、  
といって、参加しないってよ。」

結構辞退してしまったが、今いるメンバーを紹介しよう。

一護、石田、茶渡、井上、水谷、ルキア、百哉、恋次、吉良、勇音、  
雛森、狛村、射場、京楽、伊勢、檜佐木、更木、草鹿、一角、綾瀬  
川、浮竹

ちなみに、十二番隊も招待はしたが

そんな事より私は研究で忙しいのだヨ。

とあっさり断られたのである。

（てゆうか来てくれないほうが100%いいのだが…）

「てか、何すんだよ、俺達集めて。」

そっだ！そっだ！とあらゆる声が聞こえる。

「ふっふっふ、今日は何の日分かるか？」

し~~~~~ん。

「そう！真夏だ！」

し~~~~~ん。

「クリスマスでもクリスマスイブでもねえぜ！

真夏だ！」

目が死んでいる人が多数、てゆうか…全員だ。

「はあ、やつぱりこうなのか、クリスマスパーティーじゃねえよなあ、この小説今真夏だもん、真夏って海行くとかだもん、それでなんか恋次が虚の触手に足とられて飛んでくただけだもん。」

「とばねえよ、てか嫌な事思い出せてんじゃねーよ。」

「あ？、オイテメーら！夏は海だけじゃねえんだぜ！？」

「そう！山だ！！！！！！！！！！」

まあ、確かに海には何回か行ったから山に行くってなるのもおかしくはないが、コンが山というのはおかしい、

コンなら露出度の高い海に行きたがるはずなのだが…。

「山！？山ならあたしの新作料理！」

栗とわさびと牛乳のケチャップ和えのサラダが出来るよ！」

「いや、作らなくていいぞ、井上。」

早速井上ワールドが発動してしまっただが一護がささず止める、さすがはソウルソサエティの恩人だ！

「んじゃあ宿泊施設の紹介をすんぜ！」

まず、支配人は浦原喜助だ！

んで、ホテルの名前は「ホテル喜一」だ。ここまでで質問は？、はい、と一護の手が上がった。

「そのホテルには行かないほうがいいと思いまーす。」

そして、コンは無視して話を続ける。

「次に、風呂の事なんだが、混浴と男女別々の風呂がある。入りたいほうに入れ。」

「（それがコイツのたくらみか！！！！）」  
人通り話が進み、「ホテル喜一」に着く。

「じゃあ、身体検査をするから服を脱いでく…」

「誰が脱ぐか！！！！！！！！！！」

コンはルキアに踏まれ、綿が出てしまう。

「ね、姉さん、わ、綿、綿出たんすけど…」



そして、コンを踏みながらホテルの中へと入って行く。

「う、浦原さんが作った施設の割りに…結構いいホテルだなあ…おい…。」

「だが…気を付けろ…一護…」

作ったのは浦原さんなんだからなあ…。」

確かに、言われて見れば、まともな出来映えだからこそかなり危険なのだ。

ましてや本当に普通のホテルであれば、料金がめっちゃめっちゃ高いとかそうゆう系か、浦原商店の店の手伝いとかになってしまいう可能性もなくはないのだ…

もう一度言う、このホテルは浦原喜助が作ったのだ。

「おい！一護！あれはなんなのだ？」

ルキアに言われて振り返って見ると…

カウンターがあった…

しかし、ただのカウンターではない…

変なロボットがいるのだ。

「どうするよ？、行ってみたほうがいいのか？

（いや、まて、いままで浦原さんのトラップに何度引つかかった？それを考えれば行かないほうがいいだろう、だけど、行かなかったらそれはそれでトラップが発生するという危険性もある…。」

どっちだ？どっちなんだ？」

「あの…私の部屋はどこですか？」

「井上、織姫、様、は、5階、の、506、号室、で、ございませす。」

「うわー！！喋れるんだー！！」

「天、才、浦原喜助作、です、から。」

結構普通のロボットであり、（変な事吹き込まれてるが）何のトラップも無かった。

死神図鑑パール

松本「たーいちよー、もうこれくらいにして行きましょーよー。」

日番谷「よくそんな事言えんなー松本、お前が仕事しねえからだろーが!!」

松本「え~~~~~。」

日番谷「え~~~~じゃねえ!

とりあえず、この酒は京楽に上げてくる……ちゃんと仕事してろよ!」

松本「はーいーい!」

.....

松本「さすがにこの仕掛けには気づかないわね。

隊長の机のこのボタンを押すとあら不思議!

隊長の本棚からお酒が〜。」

日番谷「そういう仕掛けだったのか。俺の本棚を……」

松本「嫌、これには訳が……」

日番谷「霜天に坐せ!氷輪丸!!!」松本「きゃー!!!!!!」

現実には真冬だけど小説は真夏スペシャル！（後書き）

ふー、結構頑張って書きましたー。

では、感想や、誤字の指摘、アドバイスなどがあれば下さい。

現実には真冬だけど小説は真夏スペシャル！　くあいつのおかげでクリスマスー！

「どこだ？、どこに仕掛けがありやがる？。」

一護達は必死になって少々Sっ気がある浦原の仕掛けを探していた。

「あの人ならどこにやる？」

一護は今までの事を思い出してみる事にした。

「（…さて

さてさてさて？

よく考えたら浦原さんって仕掛けみたいな事をやった事ってあったか？

戦いの時ならあったけどそれ以外はねえな。」

よく考えると確かに無い…

仕掛けというか堂々とやっている。

ソウルソサエティに乗り込む時の召集の時だって仕掛けというかわけ狙いなのかなんなのか…

「オイ！テメーら！キャンプファイヤーの時間だぜ！

てゆうか何も仕掛けとかあるわけねーだろ！！」

「（こいつが一番騙されてる気がする。）」

言われるがまま仕方無く準備をするが、外は暑くて仕方がない…。

そう思った時であった、一護はある作戦を思いついたのである。一気に寒くクリスマス気分を得るための方法を。

「（明日がチャンスだな。）」

そしてキャンプファイヤーが始まるがはつきり言って一護や石田、茶渡にとっては何回もやった事があるため、つまらないものであった。

「（クソっ！虫が寄ってきやがる！スプレー直接あてんぞ！）」

「（僕の弓ならまるで虫除けスプレーのように虫を…ダメだ！前黒

崎に虫除けスプレーみたいで便利だよな！って言われた事があったな。」

「（ム……………」

しかし、井上だけははしゃいでいるが……

ソウルソサエティのメンバーもはつきり言って、前やった事がある季節外れの花見のほうがいいと思っている。（その桜で負傷した隊員が続出したが……。）

つまり……これを楽しんでいるのは井上のみなのだ……

あの副隊長がいれば嫌でも楽しくなっただろう。

そんな事を思いながらキャンプファイヤーが終わった。なんとも楽しくなかっただろに。

そして、風呂に入る時が来た……もちろんルキアの強い希望で男女別になった……（コンの思いどおりにさせてはならないのだ。）

「はあ、浦原さんが作ったとこの割には種類がたくさんあんな。」

「ああ、露天風呂が3つもあんなぞ、しかも水風呂も4つあるし、温度別にそれぞれ5つありやがる、誰が金出してやがんだ？」

「私だ……恋次。」

「た、隊長！」

確かにこんなものを作れるのは朽木家などの貴族しかない。

「（こいつの家には一体何円……じゃなくて、何環あるんだ？でも……現世の通貨があってもおかしくはねえな。）」

その時であった。

ぴぴぴぴっ！ぴぴぴぴっ！

「な、何だ？」

「僕の伝令神機です。」

水谷名乗った。

「な、何でお前がそんなもんを……！（俺にはねえのに！）てゆうか、風呂場に持ってきてんのかよ……！」

「そんな事よりどんな内容だよ？」

恋次が聞く。

「これは…！」

大変です！メノスグランデが2体出現！」

全員がときもを抜いた。

「俺…、代行証持つてきてねえぞ！」「俺もだ！蛇尾丸は持つてきたが…メノスグランデとなると霊体じゃねえと…。」

「石田！チャド！お前なら出来るはずだ！」

「残念だが…クインシークロスは部屋に置いてきた。」

「チャドは！？」

「茶渡君ならキャンプファイヤーの片づけ中だ。」

何という不運の連続なのだろうか。

「じゃあ水谷！お前魔法使えんだろ！」

「無理ですよ、死神の力のせいでリンカーコアが消滅してしまいましたし、もしあったとしても霊体のメノスグランデに魔法は効きませんよ。」

さらに不運の連続であつた。

「じゃあ百哉！お前鬼道で倒せねえのかよ！？」

「この義骸は朽木が発案した霊力を完全遮断するもので…これは試作品のため、霊力を使う事は出来ない…。」

「あーもー！何でそんな不便な義骸でくるんだよ！？」

一護はある事に気がついた。

「コンを使えばいいじゃねえか！？」「それなら今、散歩に出掛けている。」

あつさりと石田が答える。

「（あの野郎！！）」

まさに絶対絶滅である。

ちなみに浦原は支配人というだけでここにはいないのだ。

「なら、俺に任せな。」

その声の正体は、明日来る予定だった日番谷であつた。

「冬獅郎！乱菊さん！」

ちようどいいところに来た二人である。

「いくぜ、松本。」

「あ、すいませーん、斬魂刀持って来るの忘れちゃいました。」

「アホか!」

すかさず突っ込みを入れる。

「じゃあねーな、ここは俺にまかせろ。といてえとこだが、俺でも限定解除なしに二体のメノスグランデは倒せねえ、技術開発局の連中は今、実験材料の採取んでいねーしな。」

またもやピンチかと思われたが、思わぬ助っ人が来た。

「なに困ってるんや? 手え貸したるか?」

「アホかハゲ! お前に任せる気なんかさらっさらないわ! ボケ!」  
まさかの登場であった。

「おま、アホ! 何男子風呂に堂々入ってきよってん!」

「うるさいわハゲ! コイツらの裸なんぞ興味ないわ!」

そう、仮面の軍勢の平子真子と猿柿ひよ里である。

「何でお前らがここに?」

「何でやないわ! 俺ら抜かして楽しみよって!」

ま、とりあえず今はあれや、ささっと終わらせるで。隊長さん。

そういうと平子は虚化、日番谷は始解をし、メノスグランデを倒した。

「なんや、弱いのお。」

そういうと、虚化をとく。

「アホ真子! ウチの獲物なくなつたやんけ!」

「うるさいのお、あんましぎやあぎやあ騒ぎよると血管切れるで?」

「切れるわけないやろ! ウチを誰だと思つてん!」

「そんな事より、冬獅郎! たのみがあるんだけどよ。」

「そんな事に俺の斬魂刀を使うのかよ?

まあ、いい、んじゃ、行くぜ。」

そういうと、氷輪丸で雪を降らせた。「これでいいか?」

「メリークリスマスって感じやなあ。」

「ボケが、上手い事いったみたいな事思たな?」

「あー？つめてえんだよ！

クソが！……！」

なんと剣八が冷たすぎて雪が全てふきとんでしまった。

「おわあ……！」

ついでに一護も吹き飛ばされてしまった。さらについでにひよ里が真子をすりつぱビンタで一護と同じような感じになってしまった。

「「こんなクリスマスやってられっか……！（られんわ……！）」」

死神図鑑パープル

一護「さんざんなクリスマスだったぜ……」

真子「ほんまや……」

ひよ里「ウチは気持ちいいクリスマスやったけどな！」

百哉「そんな事よりも……私の建てたものが……どうしてくれるというのだ……！」

一護「んなことどうでもいいだろ……！」

百哉「なに？……私の作った物が気にいらぬとみえる……」

裁きを受けるがいい！

散れ………千本桜。」

「「（声にならない悲鳴を出したため音声はカットさせていただきます）」」

百哉「この季節の花も美しいものだ……」



現実**は**真冬**だけ**ど小説**は**真夏スペシャル！　くあいつのおかげでクリスマスー！く

ギリギリ12時まで間にあつた…

人気キャラの日番谷と真子出しました。

浦原さん出せなかつたなあ…

感想や誤字の指摘、アドバイスなどがあつたら下さい。

まだ感想とか一通も来てない…

## 援軍登場！

「縛道の61 六杖光牢」

いきなりの六杖光牢の出現により、一護達も内心驚いている。

しかもそれだけに驚いているわけではない、六杖光牢を使用した人物にも驚いている。

「百哉！？」

「ずいぶんなやられようだな……」

そう、六番隊隊長「朽木百哉」である。

「隊長！どっしり！どっしり！？」

「話は後だ…、来るぞ…」

破面？は、六杖光牢を力ずくで破り、意外そうな口ぶりで言葉を発する。

「援軍は一人か……？」

百哉はふつ、と笑い。

「一人で来たと思ったか？」

その言葉の直後、不気味な笑い声が入から聞こえてくる。

「ははははははは！……！」

はーっ はははははー!!!

「おらあ！！」

そう、十一番隊隊長「更木剣八」である。

「け、剣八！？」

「はっはー！！」

よう、一護、さっさとこいつ片付けて、最高の殺し合いを始めんぞ！……」

「んな事やってる場合かよ!？」

「ああ？」

だからこいつさっさと片付けて、って言うてんだろぅが。相変わらず一護にはある意味一途なのだ…。

「（流石に隊長各がこれだけ揃うとまずいな…。  
一時撤退といくか…）」

そして、破面はガルガンタを開くために逃亡を開始した。  
「させぬ…」

散れ、千本桜。」

「月牙天衝！！」

百哉の千本桜と一護の黒い月牙が破面に迫るが、ソニードでかわされ、セロを放った。

「蛇尾丸！」

恋次の狒狒王蛇尾丸でセロを弾く。

「逃がしはせぬ…」

卍解…千本桜景嚴。」

数億の刃が破面に襲うが、全て叩き落とされる。

その時であつた。

「松本乱菊十番隊副隊長様！！」

限定解除、許可申請下りました！！」その声を聞き、松本は決死の力で一護達に伝える。

「隊長！限定解除許可申請下りました！！」

「やっと来たか…。」

「…限定解除！！！！」

爆風が吹き荒れ、限定解除によって、本来の霊力が戻る。  
「いくぞ！！」

氷輪丸！！」

「狒骨大砲！！」

「終景 白帝剣」

「月牙天衝！！」

「おらあ！！！！」

日番谷、恋次、百哉、一護、剣八の一斉攻撃が放たれた、そして、勝利を確信したが、  
なんと、無傷であつた。

「残念だが、この鎧は霊圧を吸収する。残念だが、全て吸収させてもらった。」

そして、その霊圧を全てセロに叩き込める事も出来る

セロ」

そして、とてつもないパワーを秘めたセロが一護たちに襲いかかる。

「千本桜」

「蛇尾丸！」

二人がかりで止めようとしたものの、簡単に破られる。その時であった。

「縛道の81 断空

どうも、大丈夫っスか？助けにきましたよ、黒崎サン。

死神凶鑑パープル

夏梨「あたしもソウルソサエティっていうところに行ってみたいなあ。」

「

一心「な、何！？ソウルソサエティはダメだっ！危険だっ！父さん反対！」

夏梨「別に危なくねーだろ？」

一心「とっても危ないよ！？」

夏梨「例えば？」

一心「父さんに会えない！」

夏梨「やっぱりソウルソサエティのほうが安全だな。」

## 援軍登場！（後書き）

ふー

死神凶鑑パープル結構詰まってきたな…

とゆうわけで新しいコーナーも作ってみます！

感想や誤字の指摘、アドバイスなどがあれば下さい。

## 新十刃登場！？

「！…浦原さん！」

「本当は店でまっつているつもりだったんすけどねえ…。」  
爆風が収まると破面が見えてくる。

「（浦原喜助まで来たか…あそこに倒れている死神達も霊圧のゆらぎが収まりつつあるな…」

応援を呼ぶしかないな…。」

その後、一護が月牙天衝を放つが、簡単によけられてしまう。

「くそっ…！」

その後も全く攻撃せずに、よけ続ける破面に一護は、不信感を覚える。

「（こいつ、なんでさつき見てえに攻撃を吸収しねえんだ？吸収しちまえばかなり有利なはずだ…、なのに、なんでよけるんだ？」

先ほど、攻撃の霊力を吸収して、千本桜と蛇尾丸の防御を突き破り、浦原がなんとか止める事が出来たのだ…

先ほどはセロだったから良いものを、グランレイセロなどを打たれれば、浦原の防御も突き破り、全滅していた可能性もあるそれほど能力を使わないというのは、使えないのか、使った方がいいのか、どっちにしる倒せばいいんだ！」

「…一護、何の独り言だ？」

「いや、何でもねえ！」

いくぜ！恋次！」

「おい！待てよ！？」

そして、一護は敵に突っ込んでいったが、投げ飛ばされる。その時であった。

「破道の31…赤火砲！」

爆風が晴れると、精神世界から戻ってきた水谷がいた。

「ほう、よくそんな体で戦おうと思うな。」

水谷の赤火砲をよけ、少し後方に下がると、足が絡めとられる。

「なんだ…！？」

そこには、石田が立っており、石田の最強の必殺技と言ってもいい技を今、発動させている。

「くらえ！」

シュプレンガー！」

しかし、致命傷を受ける直前に、セロで、ゼーレシュナイダーを外し、滅却印の陣を破壊する。

「……………ザエルアポロ様のデータが無ければ、少々危ない所だった。」

石田は、この技をザエルアポログランツに使い、致命傷を負わせた事があるため、ザエルアポロは、回避法から消去法までしっかりと残したのであった。

「（もう霊圧なんてほとんどねえ、

たぶん虚化はもう出来ねえだろうな。）」

例え出せたとしても、一瞬で消える可能性もあるため、使わないほうがいいのだろう。

「（僕の霊圧コントロールじゃ上手くいくか分からないけど…やってみよう。）」

一方の水谷と石田は、まだ霊圧は残っているため、存分に戦える。

「まずいつスねえ…」

「どうかしたのか？」

「いやあ…」

空間に歪みが出ている…

もしかしたら、破面の援軍かも知れないっス。」

そう、先ほど呼んでおいた破面がすぐ近くに来ているのだった。

「だったら、残りの霊圧をあいつに全部ぶつければ何とかなるかもしれないねえな…！」

いくぜ！

月牙天衝！」

一護は全靈力を込めた月牙天衝を放つ、それに続いて、どんどん必殺技を出す。

「狒骨大砲！」

「千年氷牢！」

「終景 白帝剣」

「切り裂き紅姫！」

「ゼーレシュナイダー！」

「破道の63…双蓮蒼火墜！」

水谷の双蓮蒼火墜は半分の威力しか出なかったが、先ほどの赤火砲よりは威力は大きい、

今度こそ勝ったと思われたが、予期しない出来事が起こった。

援軍が来てしまい、片手で弾かれてしまったのだ。

「な…何…？」

浦原、石田、水谷以外は、靈力がつき、倒れてしまう。

「悪い、悪い、遅くなっちゃったな、本来の10分の1の力でよく死ななかったもんだ！」

「「10分の1…！」」

「（あれで10分の1とは、まずいつスねえ。）」

話を聞いていくと、どうやら靈力の研究のため、靈力を極端に奪われていたという事が判明した。

「それじゃあ、そろそろ帰るか？」

「ええ。」

…そうだな、最後に名前を教えてやろう。

第八の（オクターバ）<sup>エスパーダ</sup>十刃のブレイン トルーニだ。」

「あ！俺はみんな大好き

クルム様だ！！」

そして、ガルガンタに消えていった。

死神図鑑パール

一護「また破面かよ！？」



破面達には良い思い出がねえなあ。」

ネル「ひどいつスいづこ〜!」

一護「ね、ネル!?!」

ネル「ネルだけじゃないっスよ!

いくっス!

ネルトウ!」

ドンド「ドンドチャツカ!」

ペツシエ「ペツシエガティシエ!」

ネル ドンド ペツシエ「三人揃って!

”!」

一護「相変わらず揃ってねえな」

グリムジョー「全くだぜ。」

一護「て、てめーは!?!」

グリムジョー!?!

何でここに!?!」

グリムジョー「決まってるだろ?

出番が近いからだよ。」

ネル「とゆうわけで!次回から死神図鑑パープルの他に、新コーナ

ー!

破面達の日常が始まるっス!

見てくれっス!」

グリムジョー「それと俺様の出番も楽しみ待っとけ!」

|| ? # ?  
±

## 新十刃登場！？（後書き）

ふー、やっとネタが決まった…

死神図鑑パープルで言っただとうり

新コーナー

破面達の日常とネルやグリムジョーの順番も近いです！

感想や誤字の指摘、アドバイスなどがあれば下さい

マジで！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0422z/>

---

もう一人の死神代行

2011年12月28日22時52分発行